世界で一番皇子様☆

枝璃羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界で一番皇子様☆

【Ｎコード】
Ｎ０４８２Ｘ

【作者名】
枝璃羽

【あらすじ】
田舎で貧乏ながらも平和に暮らしていたクリスだったがある朝起きると住んでいた家も村も破壊されていた
ボー然とするクリスの前に現れたのは超ワガママな子供自称皇子のレイ
「お前俺様の家来にしてやるよ！！」
半ば強制的に旅へ同行させられることになってしまい戸惑うクリスだが…！？

破壊された日常1

そこは魔物や人間といった色々な種族がが入り混じり暮らす世界ファンタージーン
とある田舎の片隅で偉大な魔法使いの祖母をもつクリスは貧乏ながらも平和な日々を送っていた

あらゆる魔法で弱き者を保護し続けた祖母のようになりたいそう思って毎日研究や修行に励んでいる

幼い時に両親を亡くしてからずっと親がわりだった祖母は2年前に亡くなってしまった
一時は落ち込んだこともあったが優しい村人達や友人にも恵まれ今ではすっかり立ちなおり自宅で細々と魔法薬を売ったり怪我の治療なんかで生計をたてながら暮らしている

クリスは贅沢は出来なくとも自然豊かで大きな争い事のないこの土地が大好きだった
ずうっとこの土地でのんびりマッタリと暮らしたいと思っていたし当然そんな日々は続くだろうと思っていた

明くる日にまさか運命が変わってしまうだなんてクリスは夢にも思わなかったのである

破壊された日常2

凄まじい熱気を感じ目を開けてみる
取り囲む炎に思わず飛び起き辺りを見渡す
目を疑うがそこには何も無い
いや正確にいうなら昨日まで平和に存在していた筈の村は丸焦げで
何も残って無いのだ
辺りを埋め尽くす異臭と屍
何があったのか全く理解出来ない
自分はどうやら祖母の残してくれた魔法結界に守られ命は取り留め
たらしいが家は燃えつきてしまっている

突然の出来事に言葉も出ないクリスだったがふっと目線の先にまだ
生きているらしい子供が大きな樹木の下敷きになっているのをみつ
け急いで駆け寄った

魔法で樹木を浮かせるとその男の子を引っ張り出して様子を確認する
どうやら大きな怪我は無いようだ
クリスは安心して微笑むと子供についた汚れを払ってやった

「ぶっ無礼者！！俺様に安易に触れるのでない！！」

5歳くらいのその子供は何故か怒っているようでクリスは苛っとした

「御両親から助けて貰ったらまず御礼を言うことも教わってないの
か？
お前可哀相なガキだな…」

見下ろす呆れ顔に子供は益々頬を膨らませた

「俺様は龍神族第一皇子のレイ様だぞ！？皇子に向かってお前だのガキだのと…なんと無礼な奴だ！！」

龍神族の第一皇子という言葉にクリスはクスクスと笑い出す

龍神族とはこの世界でもかなり有名な気高く由緒正しい種族である

確かに皇子がいるとは耳にした事くらいあるがこんな品の無い子供の筈がない

「あのなぁ龍神族様の皇子がこんな田舎に護衛もつけずにいる筈ないだろ？」

溜め息をつくクリスにレイと名乗った子供は瞬時に身体から龍神族特有の翼を大きく広げて見せた

どうやら龍神族というのは嘘では無いらしいが何やら力不足らしくすぐに小さく引っ込めてしまった

「お前如きに俺様の高貴な翼を見せてやったのだ感謝しろ…」

そう言いながらフッと糸が切れたように倒れ込んでくる身体を慌てて支え抱えるとクリスは放って置くわけにもいかずひとまず村外れの被害の無かったらしい川辺まで歩いた

心地良い水のせせらぎに暫くしてレイは目を覚ます

汚れきっていた筈の服はすっかり綺麗になっていて先程こと切れてしまった体力も心なしか戻っている

「これはお前の魔法か？」

レイは驚いたように　クリスを見た

「当たり前だろ？少しは礼を言う気になったかよ？龍神族様ってのが偉いことくらい承知してるが礼くらいきっちり言え！！」

睨みつけるクリスの手を取りレイは目を輝かせている

「お前俺様の家来にしてやるよ！！」

駄目だコイツ話が伝わらないってか意味不明

「あのなぁなんで僕が礼もまともに言えない糞ガキの家来にならなきゃいけないんだよ！？」

クリスは手を振り払って怒鳴りつけた

「お前は無礼者だが若いくせに魔法の腕は良いようだ
俺様に黙って触れた件とガキ呼ばわりして怒鳴りつけた件に関しては礼がわりに特別に許してやってもいい…黙って家来になれよ！！」

言い放ったレイの紅い瞳が益々紅く輝くのを見てしまいクリスはしまったと思ったが遅かった
龍神族の瞳には人を縛る力がある
その瞳がより紅く輝く時その者をけして見てはいけない

目を見たら最後その者が呪縛を解いてくれるまでその者の命令に逆らえば命を落とす恐ろしい呪い

「ガキの癖に一丁前に人を呪うなんて生意気な奴…いっとくけど僕を無理やり家来にしたところでお前にかかってるらしい祟り魔法なんか解く術知らないぞ？」

祟り魔法と言われレイは顔をしかめている

「…煩い！！ともかくお前は今から俺様の家来なんだ！！レイ様と呼んで俺様を護衛しろ！！」

クリスは激しく断りたかったが龍神族の呪縛はどうやら本当に強力で口も身体も拒否は認めてくれないらしいので仕方無く肯定する

「分かったよレイ様その代わり僕のこともクリスって呼べよ…年下にお前呼ばわりされんの大嫌いなんだよね」

クリスは精一杯睨みつけている

「これからともに旅路につくのだからそのような反抗的な目はやめておけ…それに云っておくが俺様は年上だ！！」

レイは少しムキになったように睨み返したがクリスは笑ってしまった

「いやいやレイ様のどこが僕より年上だっていうんだ！？僕は一応これでも１６歳だよ？」

破壊された日常3

「16か…確かに随分発育が遅れているらしいな声変わりもしてない方がガキだぞクリス…いいか俺様はたた…ゴホッゴホッ！！」

レイが何かを語ろうとした瞬間急に胸を押さえ苦しそうに咽せ始めるのを見てクリスは目を細めた

間違いなく祟り魔法だ

祟り魔法とはその名前の通りその者を祟り何かしらの制限をつける魔法

けして死んだりはしないが祟り魔法を解こうとして他の者に詳しく祟られた経緯や祟りの内容を話そうとすると今のレイのように苦しむはめになる

「大丈夫か？レイ様…何となく分かったからソレについて話そうとするなよ？

納得いかないけどアンタが僕より年上だって一応認めておくからさ…」

背中を優しく撫でるクリスをレイは悔しそうに呼吸を整えながら黙ってみている

「レイ様それで落ち着いたら僕の村をメチャクチャにしたのは誰なのかとレイ様が何故旅してるのかを喋れる範囲で教えてくれると有り難いんだけど？」

レイが顔をしかめながら仕方無くという態度で語った内容にクリスも顔をしかめた

どうやらクリスの村をメチャクチャにしたのは龍神族の一部でありながら龍神族の王家と対立する立場のライという人物らしい
そのライが何故かこの村に向かった情報を聞きつけてやってきた時には既に其処には何も残されていなかったという

「俺様が間に合っていれば死人は少なかったかも知れないな…」

レイはどこか遠い目をしている
態度はデカいし苛つく奴だと思ったがどうやら悪い奴では無いらしい

「悪いのはそのライだっていうなら僕もライを倒して捕まえるの全力で協力してやるよ…だからレイ様今から一個だけ約束してくれないか？」

クリスは真剣にレイを見つめる
てっきりクリスが自分を責めるだろうと考えていたレイは目をパチクリさせた

「何だ言ってみろよ？」

「僕に絶対に嘘をつかないこと…それが家来の条件だ！！
レイ様が僕を付き従わせるというなら嘘は絶対つくな分かったか！？」

レイは今までこの龍神族特有の縛りの力で沢山家来をつくってきたがそんな条件を出されたのは初めてだった
自分はなかなか見込みのある少年を取り込んだらしいレイはニヤリ

と微笑んだ

「俺様に条件をつけるなんてやはり無礼者だなクリス
俺様は優しいから約束してやる嘘は絶対つかない…さてこれでお前に存分命令出来るんだよな？
俺様は疲れた…この川辺の近辺で我慢してやるから湯浴みと何か食べ物と寝床を用意しろ！！」

クリスだって疲れているが拒否は出来ないのが悔しい

「分かりましたルイ様…僕の魔法でどうにかしてやりますから暫しお待ちを」

ひとまず川辺から少し離れた場所に結界を張り其処に寝床としてテントを張った

その横に拾ってきたドラム缶を駆使してお風呂を沸かした

更に横で川の魚を何匹か焼いた

これくらいで精一杯である

レイを怒らせるかも知れないと思ったが彼はテントもドラム缶のお風呂もこのような質素なご飯も初めてらしく目をキラキラさせている皇子というか貴族なのはまんざら嘘ではないかも知れないとクリスは思った

満月の夜1

自称皇子のレイと旅をするようになって少し経った頃
語られずともクリスは分かった事がある
まず龍神族のパワーは恐らく月の満ち欠けと共鳴している
月の出ない夜にだけレイがやけに自分の近くにいるのはきっと己が弱る夜の不安からだ
逆に今日みたいな満月の夜は何故か月がのぼると慌てて何か適当な理由をつけて消えてしまい朝まで帰って来ない

それからレイは多分クリスを男だと勘違いし続けている別に性別を偽るつもりでもないけど何となく初対面時に女だと思われなかったのも今まで気がついてくれていないのも悔しいので今更自分から訂正出来ないでいる

取り敢えず今夜は満月でレイが例の如く何処かに行ってしまったのであの我が儘っぷりな要求の数々に応えなくてもいいわけだし自分は誰の目も気にすることなく伸び伸びと水浴びでもしようと思い近くの湖に向かった

月の光の中で少女は一糸纏わぬ姿で泳いだりバシャバシャと水と戯れていたが急に何か禍々しいオーラを感じ辺りを見渡した

湖の真ん中辺りからどす黒い何かが此方へと向かってくるのにクリスが気が付いた瞬間彼女の身体は宙に浮いていた

何かに抱えられ空高く湖から引き離されている

「危なかったな…もう少しであの湖の水魔の餌食になるとこだった

ぞ？
水浴びをするのも結構だが場所はよく考えるんだな…って！！お前
／／／」
クリスを抱える形で空を飛んでいるらしい青年は顔を真っ赤にして
クリスの顔をマジマジと覗き込んでいる

「何処の誰だか知らないけど有り難う…でも流石に裸だし寒いし恥
ずかしいので僕を地上に降ろしてくれない？」
クリスがシレッと言い放つと青年は目線を逸らしてゆっくりと安全
な場所まで来て降ろしてくれた

「悪いそなたの裸というか…その女性の裸を見るつもりでは無かっ
たのだ
ただ水魔が見えたので夢中で気がついたらそなたを彼処から助け出
していたのだが本当に悪いことをしたな」
勿論魔法で直ぐに服を着込んだクリスに青年はバツ悪そうに謝った
月明かりの下でもはっきり判るくらい未だにだいぶ赤い青年の顔を
見てクリスはクスクスと笑った

「悪気が無かったなら謝らないでよ？
安易に水浴びなんてしていたのは僕だし助けてくれて感謝しなきゃ
いけないのはこっちなんだからさ～っていうか顔真っ赤なんだけど
大丈夫？僕そんなにセクシーな体型してないと思うけど…」

その言葉は火に油を注いだだけのようで青年は凄くぎこちない様子だ

「セク…そっそういう問題では無い！！
俺の国では女性というものは淑やかで慎ましく…はっ裸などは／／／とっとにかく今夜見てしまったことは忘れるようにする！！如何なる理由が有ろうとも妻でもない娘の全裸を見てしまうなど龍神族の名折れだ…本当に申し訳無かった」

龍神族と言われて初めて気がつく
確かに青年の背中にはとても立派な漆黒の翼が生えその瞳は特有の紅い色をしている少し尖った耳と鋭そうな爪…レイ以外の龍神族を見るのは初めてでついジィーッと見つめてしまう

「なぁ龍神族様がこんな田舎の地域になんの用事だったんだ？たまたまなんだけど最近もう1人龍神族と知り合ってね…こんな短期間に2人も出会うなんて何かあるのかと思っちゃうんだけど？」

興味本位で訊いたクリスだったが

「悪いがそれは言えない…」

呟いて静かに身を翻して飛んでいってしまった
月光に映し出される後ろ姿は何処か悲しげでクリスの目には何時までも焼き付いていた

満足の夜２

「レイ様相変わらずおそよう様だな～朝ご飯冷めちゃったけど食えよ？あっねぇ訊きたいことあるんだけど？」

翌朝というより昼間近くクリスは中々起きないレイを揺さぶって起こしたためレイは不機嫌そうにクリスを睨んだ

「毎日俺様をこのように乱暴に起こすのはお前くらいだぞ…何なんだ騒々しい！！」

「僕昨晩さぁ龍神族の人見たんだけど…こんな田舎の地域でレイ様に続いて２人も出会うなんてレアだと思うんだよね～２０歳くらいで髪は銀髪で長くてかなりのイケメンだったんだけど…そういう人知ってる？」

レイは何故か顔を一層不機嫌にして溜め息を吐いた

「そんなことかクダラナイ…知ってるも何もそれは…ゴホゴホゴホッ！！」

何かを言おうとして苦しみ出すレイ…どうやら祟り魔法に関わる話だったらしい

「あっ…悪いこと訊いちゃったみたいだねゴメン…レイ様が知り合いだったら名前くらい教えて貰おうかと思ってさ～僕こういうの初めてだからよく分からないんだけど気になって仕方ないんだ～どうやら一目惚れしたっぽいんだよね☆」

パチンッとウインクするクリスにレイは何故か顔を真っ赤にして固まり気味である

「りゅ龍神族の王族は大抵みな銀髪だ…そいつの事をよく知りもしないで貴様…ほっ惚れたなどといい加減な事を抜かすな！！」

凄い勢いで怒鳴られ睨まれる意味が分からずクリスはプゥと頬を膨らました

「何だよケチ～恋愛は平民だろうが貴族だろうが男だろうが女だろうが自由にする権利があるんだ…まして片思いくらいで怒られる意味が全く分からないんだけど？
僕の周りの友達はみんな割と一目惚れしちゃった～とかすぐいうよ？」

レイは目をパチクリさせながらクリスを見上げている

「クックリスの国では友人と気軽に恋愛話するのが普通なのか？俺様は周りで年頃のオナゴがそのような話をするのを見たことがない…」

「レイ様の国ってどんだけお堅い国なのさ…友人と恋バナって普通だと思うんだけどなぁ？
っていうか僕が女だって知ってたんだね
～そんな素振り見せないからてっきり気がついて無いんだと思ってたのに…」

クスッと笑うクリスにレイは気まずそうにフイッと顔を背けた

「とっとにかく俺様の前であまりこっ恋の話等するな…俺様はそのような話に慣れていないのだからな／／／」

真っ赤なまま俯くレイを見てクリスはケラケラ笑い出す

「レイ様いつも偉そうだし年上だって言ってた癖に…やっぱりガキじゃん…恋愛したことも無いっていうかそんな話するような友達いなかったりして…」

何気なくいった言葉にレイの表情が再び固まるのが分かる
まさか図星なんだろうか！？

「本当に心底無礼者だなクリスは…クダラナイ話はウンザリだ早くライを探しに行くぞ！！
朝飯を今すぐ魔法で温めろ！！」

「ハイハイ…もぅ言いませんよ～だ！！」

クリスは何となくレイの弱味を握ったような気がしてフフフッと笑った

あの月夜の銀髪の男性のことが分からなかったのは残念だが謎だらけのレイと少しだけ距離が縮まった気がして嬉しかったのである

銀髪の男1

理不尽だ…僕が女の子だって知ってる癖になんでこんなに扱いが酷いんだ？

いい加減に呪縛を解けよ糞ガキ～なんて口に出せたら楽なんだけど出せない自分を呪ってやりたい
歩き疲れたという自称皇子をおんぶして歩くのは初めてではないがウンザリしている
コイツの命令に逆らえないのだから仕方が無い

レイの長い黒髪が僕の襟元にまで引っ付いて正直ウザイ
そろそろ降りろと言おうと思えばどうやら彼は寝ているらしい…どうりでやたら重い気がしたんだよね

丁度休めそうな大きな木をみつけて僕は腰を降ろし隣にレイもそっと降ろした

コイツも黙って寝てれば可愛い顔してるんだよね…龍神族ってみんなこんな整った顔してんのかな？
なんて考えていた矢先だった

「そこで寝ている少年はそなたの知り合いか？」

銀髪の青年が話かけてくる今日は翼を出していないようだが僕にはあの月夜の青年にしか見えなかったので急に現れた彼に胸が高鳴るのを感じた

「そうだけどどうかした？」

男はこの前みたいな優しい表情ではなく間違いなく同じ顔の筈なのに酷く恐ろしいオーラを放ち微笑んでいる

「ソイツは龍神族の中でも忌まわしき存在…俺はソイツを完璧に消す為にこの地にきた大人しくしていればそなたに危害は加えな…！！」

上手く言えないけど凄く嫌な感じがして相手が言い終わらないうちに気がついたら僕はレイを抱きかかえていた

「悪いけどレイ様を守るのが僕の役目だから…」

キッと睨んだ僕を見て男はクスクスと可笑しそうに笑っている

「驚いたな…俺の祟り魔法如きで知能まで堕ちたのか兄上は…こんなチンケな娘を従わせたところで何が出来…！！」

気がつくと腕の中にいた筈のレイが男に飛び付いて首元に手をかけていた

「ライてめぇいきなり出て来て余分なことまでペラペラ喋るなよ？

俺様の前に自分から出て来るとは好都合じゃねぇか…テメェが死ね！！」

「その姿で俺に力が適う筈無いだろ…そんなことも分からないのか愚かだなレイ！！」

男はレイの頭を鷲掴みにして何やら呪文を唱えだした

僕は慌ててレイを男から引き離すと同時にテレポート呪文を唱える

「チッ…」

男の舌打ちとほぼ同時にレイの不満そうな目がこちらを睨みつけているのが目に入ったが気にしない

銀髪の男2

「俺様に断りもなく敵を目の前にして逃げるとは何事だ恥を知れ！！」

パシーンッ！！

容赦なく頬を叩いたレイの頬をクリスは思いっきり叩き返した

「恥を知れはそっちでしょ！！僕がテレポートしなかったら死んでたのはどうみてもレイ様でしょ？
アンタが本当に第一皇子ならそんな簡単に死ぬな…皇子様ってのは王になって民の幸せに貢献するまで生きなきゃいけない筈だ！！
それに兄弟で殺し合いなんて僕は見たくない！！」

クリスはポロポロと泣きながら叫んでいる
クリスが急にそんな風に泣くとは思わなかったのでレイの高ぶっていた筈の感情は急激に冷めてしまった
女に頬を打たれたのも目の前でこんな風に泣かれたのも初めてだった

何故か無性に抱き締めて撫でてやりたくなったが子供のままではとても背が足りていない
仕方無しにコイツの前では見せないようにしていた本来の自分を解き放って黙って抱き締める

「えっレイ様！？」

クリスは涙目のまま驚いたように此方を見上げて固まっている
無理もないな目の前でいきなり子供が大人になりしかも自分を抱き締めているのだから…

「確かにライは双子の弟だ俺だって好きでやってるわけじゃない…俺様に皇子がどうだのと偉そうに指図をするならば家来のお前だってそう簡単に泣くな…そっそんな風に泣かれてはいい迷惑だ…」

爪で傷をつけないように最新の注意をはらいながら片手で彼女の両目の涙を拭って髪をそっと撫でたところでタイムリミット再び子供の姿に戻ってしまう

クリスは呆気にとられた表情で此方を見てブツブツと呟きだした

「あの月夜の晩に僕を助けてくれたのはレイ様なんでしょ？
ライに肉体的幼児化の祟り魔法をかけられてるから今は本来の力が出せないけど龍神族の力と共鳴する月の夜…特に満月は力がかえってくるとか？
祟り魔法を一刻も早く解いてライときちんと戦いたいけど魔法の解き方がライを倒す意外に思いつかないとか？」

祟り魔法について訊かれてもレイは無言でいるしか無かった

「喋れないってことはそうなんでしょ？
なんだガッカリ…あの夜のイケメンはレイ様か～せっかく年上の殿方とのめくるめく素敵な恋物語を妄想してたのにな僕…レイ様じゃ

肝心の性格に難ありだもんな～」

クリスはハァッとあからさまに大きな溜め息を吐いた

銀髪の男3

「先程から黙って聴いてやっていれば…お前は見かけで勝手に惚れただの腫れただのとほざいておいて尚且つ俺様の素晴らしい人格を否定するとは何事だ！！
そもそも俺様には選ぶ権利がある…お前のように乱暴で貧相な体型の女こっちから願い下げだ！！」

レイは怒りでその小さな身体全体をワナワナと奮わせているが拗ねた子供にしか見えず全く怖くない…心なしか涙目だし可愛いなぁとさえ思える

「乱暴で悪かったですねルイ様まぁそれは認めますが…僕にけして云っていけないんだよ貧相だとか結構気にさわるんだからデリカシーが足りないんじゃない？あんなに真っ赤になって見ていた癖に…許さまじ糞ガキが！！」

クリスは攻撃魔法で思い切り容赦なく主を叩きのめした
レイは意識を失う瞬間までこの後絶対この娘をギャフンと言わせてやるんだと心に誓うのだった

祟り魔法を解いてライを倒すまで精々使い倒してやる
この俺様が女だからといって手を抜いてくれると思うなよ！？

黒髪の君1

ライから逃げたあの日からレイのワガママは余計酷くなったかも知れない

なんで僕が膝枕で耳掃除なんかしてやらなきゃいけないんだよ！？

そんくらい自分でやればいいのに…

「なんでレイ様の髪って真っ黒なの？」

クリスは常々思っていた疑問を口にした

大人の姿のレイは綺麗な銀髪だったからだ

「龍神族の髪の色は魔力が高い程銀色に輝き逆に低いと漆黒に染まる…ある条件下だと銀から金になることもあってそれは美しいのだぞ」

レイはどこか誇らしげに微笑んでいる

「へぇ～ある条件下って？」

「おっお前にそこまで語ってやる義務はない！！」

何だよ自分から言った癖に…いいよ後で自分で調べるから

耳掃除が終わると2人は

ここ数日通っている国営の図書館へと向かう
口にはけして出せなかったが祟り魔法の解き方を探るために他ならない
幸いこの中では自由行動のクリスは今日はこっそり真っ先に龍神族についての書物を手にとった
レイがもったいぶった髪の毛のことを知りたかったのである
分厚い書物を捲る
何ページも捲ると思いがけず龍神族王家の家系図なるものが載っていてクリスは目が点になった
そこに書かれた末端には確かにレイの名前と写真が載っていているがレイの横ライの写真は子供のまま白黒で流行病により幼少期に死亡と書いてあるのだ
クリスは間違いなく先日大人のライという者を見た筈なのに何故！？
困惑していると手元の本がレイによってバタンと閉じられてしまった
「これに書かれていることなど知らなくていいことだ…お前は俺様を信じて従うというのでは無かったのか？
このような書物をコソコソ読んでどういうつもりだ！？」
レイは冷たい瞳でクリスを見上げている

黒髪の君2

「ぼっ僕はただ龍神族の金色の髪っていうのが知りたかっただけ！！
今のページはたまたま見ちゃっただけなんだから…そんな目で見な
くてもいいじゃんか…」

悲しげに目を伏せるクリスを見てレイは子犬を撫でるようにその髪
を撫でていた

「わっ悪かったな…たかが髪のことがそこまで知りたいとは思わな
かったんだ
金色の髪のことなら教えてやってもいいからこのような本は二度と
読むな！！」

何故だか最近クリスが悲しそうな顔をすると胸が締め付けられるよ
うに痛くなるし微笑むと自分もとても穏やかになる

「あの…ライのことは教えて貰えないの？」

怖ず怖ずと此方をみるクリス

「とうの昔に亡くなったのは事実だ
アイツは悪魔族に目を付けられ乗っ取られ今も成仏出来ずあの通り
だ…だから俺がこの手で葬ってやりたいんだ」

レイの言葉にクリスの頭からは完璧に髪の話なんて飛んでいる

何だか訊いてはいけなかったことを喋らせてしまった気がしてクリスは再び俯いた

「今語らずともいずれ知るはめになったことなのだから
そのような顔をするな…俺様まで不快になりいい迷惑だ…お前は大人しく魔法についての書物でも読んでいればいいんだ！！」

それだけいうとレイはまた離れて行ってしまったのでクリスも静かに目的の本を探した
此処には魔法関連の本なんてそれこそ膨大な数あるのでかなり骨の折れる作業だったがやっと手応えのありそうな書物をみつけて手にとった

［黒魔術禄］

埃っぽいその本は御丁寧に上級魔法使いにしか読めないよう魔法でロックまでかけてあるが勿論クリスにはこんな鍵ワンタッチである

「しかも魔法文字か…」

暗号化された文字に四苦八苦しながら一通り読むのに閉館ギリギリまでかかってしまったが収穫はバッチリだ

龍神の力1

「祟り魔法の解けるかも知れない方法がある」

クリスにそう告げられてレイは嬉しかったがその方法をきいて困惑してしまった

「それは嫌だ…龍神族にとって龍の姿になるのは裸体を曝すようなものなのだぞ？
そもそもあの姿になると自我を失う恐れがある…他の方法はな…ゴホゴホッ！！」

祟り魔法を解く方法など探ったせいか魔法にあてられ今朝から高い熱を出しているレイは呟いた

クリスは熱覚ましの薬草を煎じている

「僕の裸はバッチリ見た癖に自分は見られたくないなんてズルいよな～」

クリスに冷ややかな目で見られていることに気がつきレイの身体は強張っている

「りゅ…龍の姿になったところで…ゴホッ龍神様に逢えるわけが…ゴホッゴホッ」

クリスはクスリッと笑っている

「逢えるよ僕と一緒ならね…僕に目をつけて家来にしたこと大正解だったって思うと思うよ☆」

レイは訳が分からず困惑している
龍神様とは龍神族を守護する立場の最も尊ぶべき神であり王族といえども易々会うことなど許されていない
クリスはその龍神に会って保護を受ければ祟り魔法が解ける筈だというが龍神と直接会う等まるでお伽話だ

「とにかくレイ様が龍の姿にさえなってくれたら僕が絶対に逢わせてあげるから我慢してくれない？
天界へは本来の姿でないと入れて貰えない決まりなんだ…」

クリスは真剣にレイを見つめながら煎じ終えた薬をレイの口元まで持ってくるがレイは咽せ込んでいて苦しいのか薬を飲もうとしない最早喋るのもキツい様だ

「全くしょうがなさすぎ…レイ様後で怒らないでね？」

クリスは己の口に薬を含ませると迷うことなくレイの唇に重ねて無理やり飲み込ませた
ついでに魔力と精気を送り込んでいく突然の舌まで入り込んでくる長い口づけにレイは目を丸くしてクリスを突き放そうとするがクリスは暫くけして離してくれなかった

「ハァ…どう？楽になったでしょ？」

数分後唇を離して微笑むクリス

レイは確かにすっかり気分が良かったが頬の赤みは消えないどころかまともにクリスを見ることが出来ない

「レイ様まだ気分悪いの？」

覗き込むクリスにレイはボソッと呟いて布団を頭からかぶってしまった

「俺様は熱をそこまでして下げて欲しいなんて頼んでない…起きたら龍でも何でもなってやるから…少し放っておいてくれ…寝る！！」

少しふてくされているような声色のレイだった

龍神の力2

レイは今までで一番ドクドクと波打つ心臓をどうにか落ち着かせようとしながら布団の中で1人物思いにふけっていた

クリスがただの少女（出逢った時は少年と思っていたが）ではないことくらい分かっていた
だからあの時に無理やりにでも家来にしたのだ

今更だが思った以上にただ者ではない
あれだけの精気と魔力を他人に送り込み尚且つピンピンしている等有り得ない

レイは初めてのキスは心から惚れた女性とロマンチックな場所で自分からすると密かに夢見ていたのに余りに突然に年下の少女に奪われてしまったことを認めたくないというか
あの舌遣いからして向こうは初めてでは無かったような気がするのがショックだった

一体何なんだあの娘は！？

俺が龍の姿を曝したところで天界へ入るには天界の民の了承を得ねばならない筈だ…天界…まさかアイツ…！？

レイは幼い頃に乳母がしてくれたお伽話のような天使族の話を思い出していた

天使族の皇女は天界において龍神様に恋をした龍神様もまた皇女に恋をしていた

神様と天使の恋はタブーだったが2人は気持ちを抑えることが出来ず愛し合って密かに子供を産んだ

だがその事は天界を司る王にすぐにバレてしまい皇女は泣く泣く子供を連れて下界へ追放された

皇女を失った天使族は余りの悲しみに百年間泣き続け遂には滅びてしまった

何年も月日だけは流れ下界で暮らす皇女もついに亡くなってしまった

心優しい皇女は誰を恨みこともなく死ぬ直前まで下界の民の幸せの為に全力を尽くしたという

皇女の意志を受け継いだ娘は自らもその強靭な魔力を生かし民を救い続けた

やがて娘は偉大な魔法使いとして民から讃えられ今も世界の片隅で最愛の孫娘とともに幸せに暮らしている

何年も時を経て天の王は天使族の皇女を天界から追放したことで天使族を滅ぼしに至ったことを深く反省し

最後の希望である孫娘に天界族の姫君としての称号を与えこの世界最大の保護を与えた

天界族の姫君は…お前なのかクリス？

だとしたら自分はとんでも無い失態を起こしている

天界族の姫君を無理に自分に付き従わせるなどあってはならない事態だ
龍神様がこの愚かな自分を認めてくれる筈がない
ここまで何も気がつがなかった自分の失態に己を呪いそうになる
なんと愚かでちっぽけな存在なのだ自分は…悔しい…やはりあの時ライではなく自分が死ぬべきだったんだ…不意に涙が溢れ出してきた

龍神の力3

レイは布団の中で声を押し殺し泣きながら静かにクリスにかけた束縛の術を解いた

あの娘がもし天界族の姫君で無くとももう巻き込みたくないと思えたからだ

祟り魔法を解かなくてもライを救える方法が1つだけある

双子である自分が己自身の魂を捧げ浄化すれば良いのだ

それは第1皇子という立場と死を恐れる心からどうしても踏み切れなかった選択だったがライを救いクリスをこれ以上巻き込まず

この自分勝手な忌々しい己も消せる

本当に最初からそうすれば良かった…自分には弟達もいる国は任せられるのだから…

ライが死んだのは病などではない悪魔族からレイを庇って死んだのだ

あの時自分さえ死を恐れずライを救えていたらよかった

のうのうと生き長らえてしまったからクリスと出逢った

クリスと出逢わなければ別れがこの様に辛いなどと感じる感情は生まれなかったのに…

彼女はどうしょうもなく愚かな俺に生きろと言ってくれた

それだけで十分だ

彼女の居場所を最悪な状態で絶やした原因は自分なのにこれ以上彼女を傷つけるかも知れないことはしたくない

自分の元から離れてどうか幸せに生きて欲しいと願う

とにかく涙が止まらないので止まるまで布団の中にいることにした

レイが死のうと決めたことを知れば間違いなく怒るであろうクリスに気付かれず彼女を突き放すためレイはともかく今までと同じように振る舞わねばならない

クリスのふわりとした身体と柔らかい唇と暖かい笑顔を思い浮かべてレイはそっと目を閉じた

窓から入ってくる風にレイの髪は一瞬金色に輝きなびいたが誰も気がつく筈もなかった

龍神の力４

レイは戸惑っていた

先程まで自分はベットの上に居た筈なのに今何故か花畑に立っているのだ

目の前には白く大きな翼を携えた美しい女性と寄り添うように黄金の翼を携えた立派な龍がいる

女性はレイに向かって優しく微笑みかける

「聡明な龍の皇子よ貴方の覚悟は伝わりました…ですが私は貴方が自ら命を絶つ行為を望みません…大切に想う方がいるなら生きて自然にその命尽きるまでその方を愛し抜いてみて下さいませんか？」

レイはフルフルと首を横に振った

「俺には愛される資格も誰かを愛する資格も微塵もありません…今まで…この世に誕生して２０年皇子という立場に甘え沢山の者を力で従え友人と呼べる者も居ない…大事な片割れの魂すら救えず愚かなこと極まりないのですから」

「聡明な龍の皇子…本当に愚かな者というのは自分の愚かさに一生気付かずに悪に取り憑かれ溺れる者のこと…貴方は気がついたのだからやり直す事が出来ます…死ぬ覚悟があるなら生きなさい…貴方

が生きたいと望めば龍神様は貴方にも他と変わらぬ保護を授けて下さいますよ？」

女性の眩い微笑みがこの世のものとは思えぬ程に美し過ぎてレイは目を奪われ固まってしまった

金色の龍は遮るようにレイをその翼で包み込んでいる

「悪いが彼女をそのように凝視して良いのは我だけだ…なぁレイお前は生きたいか？」

金色の大きな瞳がレイをジッと見つめている

レイはカタカタと小さく振るえながら絞りだすように呟いた

「生きたい…」

その言葉に反応するように金色の龍は人型に変化してレイを抱き締めその頭を撫でた

「よく云ったな…」

その男性の腕の中でレイはまだカタカタと振るえている

「りゅ龍神様…俺は生きても宜しいのでしょうか？」

涙を流すレイを更にギュッと抱き締めて男性は優しく微笑んだ

「生きてはいけない命等この世にあろう筈が無い…お前も愛され産まれてきたのだからこれから誰かを愛し愛されて精一杯生きろ
お前にかかった祟り魔法は我が解いておく…我もお前を愛していることを努々忘れるなよ？」

「聡明な龍の皇子…私達の大事な姫君をどうか貴方も大切にしてやって下さいね？」

金色に輝く聡明な龍神と純白の天使は仲良く寄り添ってにっこりと微笑んでいた

目覚め1

「レイ様！？どうして元に戻ってるの？」

元の年齢の姿に戻ったレイがいきなり現れたのでクリスは驚いている

「まぁ色々あってな龍神様が祟り魔法を解いて下さったんだ…もうお前に頼らずとも大丈夫だ…束縛術解いてやったぞ有り難く思って俺様の前から消えればいい…」

言い放ったレイをクリスは納得のいかない様子で見上げた

「束縛術解いてくれたのは有り難いけど…今まで散々こき使っといてたまたま元に戻れたからって僕を巻き込んだのを白紙に戻す気！？僕の存在ってレイにとってそんなもんなの？」

「何か特別だとでも思っていたのか？
図々しい…心配しなくともお前の村の敵は俺様がとってやるし俺様がライと決着をつけた暁にはきちんとお前のもとにこの度の報酬を好きなだけ送りつけてやる」

レイがそう言い終えたと同時にクリスはレイの両頬を思いっきりつ

ねった

「言いたいことはそれだけかい糞皇子…僕は報酬が欲しくてレイに遣えてやったんじゃないよ！？
そんなこともまだ分かってないなら意地でもついて行くよ？
この口如きでこの僕を突き放せると思ったら大間違いだ！！」

高々と宣言するクリスにレイはヒリヒリする己の頬を撫でながら微笑んでいた

「わざわざ逃げ道をつくってやったというのに馬鹿だな貴様は…そんなに俺様と離れたくないなら仕方が無い…足でまといにはなるなよ？」

レイにポンっと肩を叩かれてクリスは悔しそうにしている

「べっ別にレイなんかとは離れたくてウズウズしてるくらいだけど中途半端は嫌だから最後まで付き合ってあげても良いって言ってんの！！
何だよ偉そうに…いっとくけど魔法だったら僕絶対レイには負けないからね！？」

レイはプイッと背けたクリスの身体を後ろからそっと抱き締めた

「なぁクリス…俺に惚れたという話はやはり冗談だったのか？俺は惚れた女がいたとしてそういう時は本当は離れたくないものだと思うが…お前は違うのか？」

「何その質問ずるくない？離れたくないって言っても離れたいって言っても何か僕が不利みたい…レイってやっぱり性格が歪んでるんじゃないの？」

呟いてレイの腕の中からすり抜けてレイの方を見たクリスは困惑する何故ならレイが思いの外悲しみに満ちた瞳でクリスを見ていたからだ

「ちょ…レイどうしたの？なんかその姿に戻ってから変じゃない？子供の姿の時とえらく違うっていうか…」

目覚め2

何だかレイが自分にワザと嫌われようとあんな風に意地悪をしているような気がしてきてクリスは胸が痛くなっていたのだが
それ以上に悲しみに満ちた彼の瞳から涙が流れているのを目の当たりにしてクリスはどうしたらいいのか分からなかった

「クリスが俺のことを嫌いだったとしても俺は本当はお前に傍に居て欲しい…ただお前には俺の為にこれ以上傷を増やして欲しくないんだ…分からぬか？」

深紅の瞳からシトシトと流れて落ちる雫にクリスはドキリとした

「ねぇレイ…僕だってレイがこれ以上傷ついたら嫌だよ？
僕は本当に君が好きなんだからね／／／
だからよくわからないけど僕を突き放す為にワザと意地悪したりしないで最後まで同行させてよ？
僕そう簡単に傷つけられる程柔じゃないよ？」

クリスが微笑むとレイは今度は前からしっかりとクリスを抱き締めた

「試すような事を言って悪かったなクリス…俺もお前のことが好きだ／／／」

クリスは何か今信じられない言葉を聴いた気がして目を見開いて見上げると真っ赤な顔のレイが視界いっぱいに入ってくる

「僕夢みてるのかなぁ…」

呟いた矢先に唇を塞がれた凄く短いキスだったけど確かにレイの感触が伝わってくる

「夢になどするな…俺が天界族の姫君かも知れないお前に正直な気持ちを云うのにどれだけ勇気を出したと思っている？地を司る龍神族と天を司る天界族との恋愛は昔から最もタブーとされているのだぞ…」

天界族の姫君という言葉にクリスはビクッと肩を震わせた

「レイ…知ってたの？」

「いや…確信は無かった…だがそんなこと関係無いと思える程に俺はお前に惚れているらしいのだが…迷惑か？」

レイの深紅の瞳は心なしかまだ潤いを保っている

「嬉しい…僕もレイとなら禁忌を犯すのも怖くないみたいだ」

2人は再び唇を重ねる今度はとろけるような濃厚なキスだった

こんな時間が永く続いたら良いのに…クリスはレイの腕の中でまどろみながらただ目の前のレイだけを見ていた

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0482x/

世界で一番皇子様☆

2011年9月29日14時35分発行